

江戸に咲いた秋田の華「秋田蘭画」

「秋田蘭画」の誕生

江戸文化の成熟は絵画にも多様な表現をもたらし、様々な流派が生まれた。狩野派、琳派、円山派はよく知られるところだが、18世紀後半、西洋文化が普及しそれを学ぼうと蘭学が興る頃、彗星の如く煌めき、そして忽然と消えた画派があった。それは秋田藩の武士たちが描いた「秋田蘭画」である。主たる絵師は秋田藩士小田野直武で、日本医学界の偉業「解体新書」の挿絵を描いた人物だ。「解体新書」刊行の前年、秋田を来遊した平賀源内に画才を見出されたという。源内の後を追うように江戸に上り、源内をはじめ蘭方医杉田玄白ら時代の寵児たちと交流する中で、直武は江戸文化、西洋

文化に触れ蘭画を創始した。

「秋田蘭画」は伝統的な日本絵画に西洋美術の遠近法、陰影法を導入したもので、今では「洋風画」と呼ばれる。長崎系、江戸系、須賀川系に分類され、中でも江戸系に属する「秋田派」は「秋田蘭画」は武家の教養と気質を色濃く反映し、芸術性は高く評価されてきた。代表作は小田野直武筆「不忍池図」（重要文化財）である。

「不忍池図」をめぐる謎

絵の主役は咲き誇る紅白のシヤクヤクでキンセンカ、セージの鉢植えが不忍池畔に描かれている。花鳥

画の背景に風景を描き、今で言うバーチャルリアリティを追究したのが「秋田蘭画」の典型である。描いた植物の



小田野直武《岩に牡丹図》1770年代／秋田県立近代美術館蔵



重要文化財 小田野直武《不忍池図》1770年代／秋田県立近代美術館蔵

開花期は春（キンセンカ）、夏（シヤクヤク）、秋（セージ）であり、おそらく蓮池で知られる不忍池にハスを描かず、冬景色として、伝統的な花鳥画様式「四季絵」に倣ったのだらう。

しかし、植物は陰影法による影がほ

どこされ、立体的に写実的に表現しようとしている。また池畔に並ぶ家並みは不完全ではあるが線遠近法を用い、遠くへ行くほど小さく描いた。何より、手前の植物を濃彩で、池の対岸の風景は淡彩で描き出し、空気遠近法を試みている。これらの画法は従来の日本絵画にはなかったもので、伝統絵画の様式に写実性の高い西洋美術の画法をミックスしたものである。

背景には上野池之端の雑踏を感じさせない静けさが満ちている。その中に凜として咲くシヤクヤクは茎をつたう蟻まで描き込まれ、匂い立つほど艶めかしい。「立てば芍薬」というが、このシヤクヤクを希代の美女に比定する論説もあるくらい、その姿は画面にあって象徴的だ。「不忍池図」に魅せられた研究者たちは、西洋美術導入の言及に留まらず、江戸文化の中で「秋田蘭画」が生まれた要因を探り始めている。なぜ不忍池が舞台になったのか、どうしてこれらの花々が選ばれ描かれ